『運歩色葉集』批判
――『易林本節用集』と関連して――

杉本　つとむ

【要旨】　中世に成立した辞書、『運歩色葉集』にせよ、『易林本節用集』にせよ、現代の辞書学的立場から批判するならば、辞書にあらず、いずれも中世語彙の宝庫として研究対象となる語彙集である[*(1)]。後者の方が多少は整備されているが、現代国語辞書では、その〈部門〉別の方式はまったくなく、語彙が少ない点で、索引を作成すれば、辞書的に使い易くなろう[*(2)]。外国の辞書・語彙集について、成立の事情を知らぬが、日本的独特な中世語彙集として、『運歩色葉集』を主とし、『易林本節用集』との比較を以下に考察する。

（1）

『運歩色葉集』（影印本）の批判であるが、比較考察する資料として、「日本古典全集刊行会板」の「日本古典全集　節用集（易林本）大正十五年三月刊」として影印で刊行した『節用集（易林本）』（以下、『古典易林本』と呼ぶ）を使用する。同書は文庫本サイズながら、影印はかなり明刷であり、解題（刊行者）、解説（文学士橋本進吉氏）が巻頭にみえ、参考になろう。〈解題〉には、〈解説〉を〈文学士橋本進吉氏に執筆を乞うて掲げる事を得た〉とある。私が批判とした『運歩色葉集』は、京大国語学国文学研究室編として、『元亀二年京大本運歩色葉集』の書名で出版した影印本（昭和四十四年十二月刊）である。私は同影印本の原本は未見であるが、同書は冒頭部分に序らしき記述があり、成立は〈天文十七年（一五四八）〉と思われる。これを私は〈天文本運歩色葉集〉（略称、『運歩』とする）と呼ぶことにする。『古事記』など古典は、鎌倉期などに書写されているが、いずれも成立を重んじ、受容研究対象としては成立の和銅四年（七一一）とし研究鑑賞されていると思う。その態度に従ったまでここの方が

好ましいと思う。『運歩』の元亀二年（一五七一）は書写年代で、成立期とは異なり、約二五年の隔りがある。且は書写人、〈筆者師岡〉なる人物は、編者でもなく、彼の言語体系にはかかわらず、直接対象とすべきではない。成立させた人物、すなわち『運歩』の内容構成などこそ、重要であると愚考したゆえである。『古典易林本』の橋本進吉氏による〈解説〉（約二頁余）で、問題とするところをつぎに抜き出す。

「易林本節用集」には二種あつて、下巻最後の丁の跋文の前の余白に黒字に白字（白抜き）で「洛陽七條寺内平井勝左衛門休與開板」と出版者の名を刻したものと、全く出版者の名の無いものとがあるが、この二種は一見同版のやうに見えるけれども、実はさうで無く、平井休與の名のある方が原刻で無い方はやや後に出来た複刻のやうにおもはれる。この易林本の最初の出版者平井休與は本願寺准如上人（一五七七「天正五年」――一六三〇「寛永七年」）の俗（ママ）臣だと云ふ事である。（中略）「易林本節用集」は慶長二年の版とおもはれるが、（中略）現存せる最古の刻本で、自分の見聞の及ぶ所では唯二部だけ伝はつてゐたが、一部は震（ママ）火に滅びて今は一部を存するのみである。最後に、〈大正十五年二月二十日橋本進吉記〉とある。

右の橋本進吉氏の解説で、氏の解説した『古典易林本』は刊本で原刻と断じ、〈慶長二年の版〉とされている。しかし、同書はどこにも刊年を記した文字はなく、氏の述べる〈跋文〉とは、巻末の〈皆慶長二丁酉易林誌〉とある識語をさすと思われる。あるいは刊行者による〈解題〉の〈原本は、帝室の御物となつてゐる慶長二年版を、特に宮内大臣の許可を得て、全部そのまま写真凸版としたのである〉をそのまま理解了承してのことであろう（いずれにせよ、刊年はみえない）。また同〈解題〉に、〈一、此原本の巻末に三通りの附記が有る。一は「自慶長二丁酉歳、至天明八戊申歳、百九十二年、逐年羅干（ママ）回禄之憂、今存干（ママ）江戸□□、恐不過干（ママ）十本焉」と有り、是れは天明八年（一七八八）に此書を蔵して居た人物が、記して置いたものである〉とみえる（他の二つの附記は略す）。

いずれにしても原本に刊年はみえず、先にあげた白抜き（白字）による開板の点と個人名のみで、刊行者の解題も慶長二年を刊年と誤ってのべているが、あえていえば、〈平井板易林本節用集〉で、『平井板易林本節用集』という無刊

記本と紹介すべき一本である。したがって橋本進吉氏が、〈「易林本節用集」には二種あつて……〉とのべている点は現時点では訂正すべきで、〈慶長十五年開板〉と刊年を明示して刻した一本が存在しており、この刊本は私どもが、『小山板易林本節用集』（影印本）として出版した一本である。すくなくとも慶長十五年と、刊年を明白に刻した刊本はこの小山板のみで、書誌的には、〈二種〉ではなく三種と訂正すべきであろう（詳細は同影印本の解説を参照されたい）。むしろ現存本で明白に刊年、刊記を刻した『易林本節用集』はこの〈小山板〉の一本のみかと思う。

なお橋本進吉氏の解説には言及されていないが、同影印本を一見すれば判明できるように、〈帝室の御物〉という一本で、現在は、〈書陵部〉に所蔵されており、落丁があって、原本を私が書陵部にいたときに披閲したが、その部分を補写して挿入したことを見出して、唖然とした思い出がある。影印本でもよく見ると、刻字の文字と、生まの書き字での、書写文字の補訂の見える丁とは、字体の異なりが判別できる。〈解題〉も〈解説〉も、この点、一言ことわっておくべきで、明示していないのは、書誌的にもまことに不備といわざるをえない。

さて、『運歩』は、同影印本の〈解題〉（これは単に解題などではなく、まさに論考というべき内容である）は、詳細をきわめ、研究考察すべき点を明示している好論文で、これまでの研究の一端も紹介批判されており、問題点は残っていないようである。しかし同氏が、〈本書を、文字生活、言語生活の資料として、改めて検討し直さなければならないと思う〉と、反省の弁を示されているように、『運歩』の漢字、その書体や語彙にはまだ手つかずというところである。また言語生活――『運歩』中に、〈士農工商〉の言葉が見えるが、私は〈公・士／農工商〉と支配者に、〈士〉のみでなく、〈公（地下人、歌学者、学僧など）〉を想定、加え――すなわち、『運歩』の構想、具体的には、『運歩』を生んだ中世、その言語社会の語彙を考察してみたいと思い、拙文をつづった次第。また解題者安田章氏紹介の、〈三　他書との関係〉の一部で、〈山田忠雄氏も、節用集→運歩の線よりは寧ろ、運歩→節用の線の方が妥当なるかに見える〉と「弘治二年本類の節用集」などをあげて、従来とは逆の関係を提唱されている〉（同解題の十九頁）と紹介、この点は、私も山田忠雄氏の推定に賛成である。さらに私は、〈節用→運歩・運歩→節用〉

の想定の線とは別に、江戸期ながら内容的には、『和漢音釈書言字考節用集』的なものにこそ展開すべき性格をもった作品で、内容的にも第三の関係を推測、想定している。そして辞（字）書というより、やはり『運歩』は、個人的記述の備忘的語彙集ノート（固有名詞の類をふくめ）と考え、〈辞書〉とはいえぬレベルの異質な書と推断している。

著者は当時の節用集類（未発見のものなどを含めて）の活用披閲などよりも、最終的にはむしろ往来物の類を披閲、活用していると思う。この点についてはあらためて私見をのべたい。本稿では『運歩』を『古典易林本』などの類とは無縁の語の蒐集や構想を認めるべきと考える。考察のプロセスとして、いちおうは比較すべく、研究対象として、『古典易林本』という節用集を選んだわけである。以下、具体的に『運歩』と『古典易林本』とを比較考察して、私見の一端を披露しておく。

（2）

考察の対象は『運歩』（運と略称）の〈免（メ）〉の部と『古典易林本』（易と略称）の〈女（メ）〉の部の語彙をとりあげる。但しこれには、後者が部門に分けている構成の点を考慮したい。以下必要により、（　）にその部門名を示す。

○運：眵（メクソ）　易：眵（メアカ）（支躰）。メクソは目糞、メアカは目垢とそれぞれ同じものながら、語として異なる。この点は注目しておくべきであろう。おそらく〈運〉の方が、俗語的で一段低い中世的な言語社会を示す例といえるであろう。これは〈易（言語）〉に、〈圍（メグル）・珍敷（メツラシク）〉、〈運〉には、〈囲（カコム／カヨウ（左））・珍敷（メツラシ）〉とあり、ことに〈運〉には漢字の略体が目立つ。他の部でも、〈尸（カバネ）・門（カド）・臾（カヲヨシ）・風（カゼ）・体（タイ）・国（クニ）（〈易〉では国とシナの漢字）・炉（ロ）・万（バン）・才（ヲト、）（弟）・辞（イナ）・尽（ジン）・栄（エイ）（栄花（エイグワ））〉など、ごく一般的にみえ、〈運〉はこの略体が中心といえ、必ずしも正確な略し方ではない。また、〈吊（トフラウ）亡者（ヲ）・刈（ハン）・負（カス）・解（トクル）・殺（ヘナツ）・逮（イ）〉など、〈俗字〉の〈辻（ツジ）〉など、〈和字〉などもみるが、いずれも正しい略し方、くずし方ではなく、自己流で、〈易〉では、〈弔（同一死人ヲ一也）〉（言語）〈トフラフ〉と、正体の〈弔〉のみで示す点など、両者の

異なりは明確であろう。〈運〉が一般により低い階層社会、また個人的にまともな漢字字体の学習もなく、認識なしに使用するなど、いささかいい加減で日常生活のレヴェルにすぎず、その点、学習した〈易〉とは異なる。なお漢字字体などはのちに再びふれる。

さらに語彙の場合を一見すると、〈運・易〉ともに、〈松柾（ムナサハギ）〈運〉・松（ムナサハギ）、悸（同）〈易〉〉とか、〈太皈（ヒタスラ）　大疋（同）遊仙窟　太火（同）疋女　疋如（同）河海　直平（同）　一向（同）（以上〈運〉）／混空（ヒタブル）　大戀（同）　平天（ヒタソラ）浸空〈以上〈易〉〉のように、共通した同語彙――但し、漢字表記は別。中世的語彙〈平天（ヒタソラ）〉が〈運〉に見えぬ点はむしろ注意しておきたい――がみられる。ヒタスラ→ヒタブル→ヒタソラの語形変化と思われるが、ヒタスラは古代より現代まで一貫しており、私個人では、〈只管（ヒタスラ）〉をもつ。しかし用字の漢字語[3]にあって異なる。つぎに、〈面（面とも）〉にあっても一考したい。

〈運〉の〈面（メン）ゑ・面箱（バコ）・面倒（ダウ）〉などは、〈易〉に見えず、〈易〉には、〈面倒〉はなく〈迷倒（メイタウ）〉があって、両者の属する言語社会を異にするといえそうである。〈面（メン）ゑ〉は『平家物語』にみえるなど、この時代に新しく出現した用字であろうか。〈綿密（メンミツ）〉も両者にみえるが、〈易〉に、〈綿ゑ密ゑ〉と細字註としてみえるので、メン〳〵の修飾的用法から熟語として成立したかもしれない。〈目（メ）〉も両者とも、〈目安（メヤス）〉をみるが、これは鎌倉時代に作られた語で、〈目安書・目安状〉などからの用語であろうが、〈運〉に、〈目（メデ）―出（タシ）〉、〈易〉に、〈目出度（メデタク）〉とあり、この時代の表記であろう。ことに前者には細字双行の註文で、天照大神岩戸ニ引籠り、やがて神楽をきいて岩戸を開き出給う――諸神喜んで、〈目出（メデタシ）〉といったことからと由来を説明。今に祝事に、〈目出〉というとある。〈易〉はこうした註文はまったくない。また〈運〉には、〈目薬（メグスリ）・目付（メツケ）〉が見えるが、前者はこのころ、〈目医師（くすし）〉も出現しているというから、当時の生活の一端を示していることにもなろう〈ともに〈易〉にはみえない〉。また先にあげた〈面倒（ダウ）〉（運）と〈迷倒（メイタウ）〉（易。『岩波古語辞典』にはみえぬ）を考えると、おそらく、迷倒→面倒と変じた語形と思われるので、〈運〉は俗用と考えられる。現代もそうであるが、やがて〈面倒〉が一般的となり、江戸期には、〈迷倒〉などはみられない。『岩波古語辞典』に、〈面倒（めんだう）〉を〈メンは目（メ）の転で、だうは手間だう〉など、近松の作品を引用して接尾語と説明しているが、果たしてどうか。〈迷惑（メイワク）、迷倒（メイダウ）〉の〈易〉を支持した

い。語彙の流れから、〈面倒〉が一般的となるわけだが、このへんが両者に根本的な違いがみえ、どうであろうか。やはり属する言語社会の異なりを暗示していよう。〈目付〉（運）など、〈易〉にない点も参考にできよう。

またバカ（現代、〈馬鹿〉と書く語）は、〈運〉では、〈破家・馬鹿（カ バカ）指レ鹿ヲ曰（シカヲ）馬ト之意也（リヨク）（一・十ウ。破には読みなし）・馬嫁（同）〉とあり、〈易〉では、〈破家（バカ）狼藉義也　馬嫁（バカ）〉とあって、共通するようであるが、〈易〉には〈馬鹿〉をみず、当時としては、『雑字類書』（写本）にもあるが、〈運〉の例はおそらく現代の〈馬鹿〉の初出ともみられる。しかし、江戸初期の西鶴作品などに、〈破家〉はあっても、〈馬鹿〉はみえない。当時の雑字というジャンルになるか。これは俗用の意をふくむ。〈運〉の属する社会や語の位相まで推定されよう。〈易〉に伝統的な点をみるのであるが、また〈運〉の貴重な点と解したい＊(4)。

〈カホ・ツラ〉を考えてみる。現代の日本方言地図でも、カホは〈西〉に新しく、〈東〉に〈ツラ〉が関東や九州の方言とみえる。それだけ〈頬（ツラ）〉は、古語であった証據でもあり、伝統のある古代からの日本語であった。この時代の新しい〈顔（かお）〉は、〈運〉には、二次的に、〈顔（カホ）〉とか、正規には、〈貝（カヲヨシ）〉でみえるが、のち、近世初期――たとえば西鶴作品など――でも、カホは、〈貝〉が一般的表記である。〈運〉も〈易〉とともに、伝統的、正規の〈頬（ツラ）〉とあるのは言語史的、社会的に当然である。これが伝統的であり、日本語としても正当であったろう。しかし〈易〉には、〈面（カホ）・顔（カホ）〉と新しい語形のみえる点、やはり〈運〉より正式というか、この時代ではもはや、ツラよりカホが標準的となってきた証しであり、〈顔〉の出現である。方言的ではない新しい都の言葉を反映し、ツラは方言化しているといえる。〈運〉の語彙を話す人びとは、やや下層というか、低い社会の人びとに属するであろう。この〈易〉や〈運〉の編集、成立した十六世紀は、もはやツラは卑語とか方言的に、都人から排除されていたと思う。低い語格ともいえるか。〈易〉は、〈運〉より保守的層を示していると思う。他に〈易〉の〈玉門（ツビ）・開（同）〉などは、古代からの伝統的用字を示し、高級でもあって、〈運〉にみえないのは当然であろう。やはり、ツラ、カホとみえる〈易〉と、同じ支配階級の、すこしあらたまったことばの使用層と推定できそうな用語である。ツハ（ワ）リなども、伝統的な〈擇食（ツハリ）〉

が、〈運・易〉の両方にみえる点は、まさしく古代より延長の像を示すが、〈運〉の〈求貪（食の異体）〉と訛り語形、ツワイでみえる点、やはり〈運〉の用字は、〈易〉より一段低い階層社会の人びとの言語生活の反映を推測させよう。なお〈運・易〉ともに、〈悪阻〉は見えない（これはシナ語語彙なので、江戸期の用字であろう）。

もう一例、同類のトツグをあげておく。〈運〉は〈嫁帰（言ハ女人ノ適ニ夫家ニ一如シ帰ニ己カ家ニ一故ニ同レ一カヘルトレ一ニ）〉と近世的意味用法とみえる。しかし〈易〉には註文なく、〈嫁婚帰〉と三語をあげる。トツグはまさにト・ツグで、男女の性の営み、性交を示した。〈嫁〉は祝詞などにもみえるようであるが、のち、江戸初期の『和漢音釈書言字考節用集』には、〈交接、嫁〉がみえる（〈運〉には〈交接〉がみえる）。

漢字、〈嫁（家ト女ヲ結ビツケル意味）〉、すなわち日本人とシナの人とは根本的に異なる考えを示す点も理解しておくべきであろう。しかも江戸初期まで、〈嫁＝交接〉の思想はあったものの、江戸期の儒教教育はやがて、急速に日本社会は女が家ニ入ル思想、漢字概念の普及、徹底によって、〈交接〉の真意が忘れられて今日に至ると思う。いわば、十六、七世紀が、その一つの分水嶺で、〈運〉の細字註文は貴重であろう。〈運〉で〈婦夫〉とあり、〈易〉で、〈妻夫・夫婦〉とあるなど背後の教養の落差も推測させる。

○〈運〉に、〈毛嫌〉（二・四四オ）のみえることは、一つの大収穫である。原本では、〈毛嫌〉とみえて、ケギライと読みとった。『岩波古語辞典』、講談社『江戸語の辞典』、ヘボン『語林集成』にも見えず、ごく新しい言葉で、〈毛〉は〈気〉の転か？などと考えていた。『広辞苑』は、出典をあげず、〈毛獣が相手のけなみによってすききらいする〉と解を示す。鳥獣にもそんな好悪を区別する英智があるのか？しかし、研究社『国語新辞典』（昭和二十六年初版）に、〈毛嫌い　闘鶏で鶏が相手の鶏の毛並みを嫌って蹴合わぬことから、何という理由もなく気分的に嫌うこと antipathy〉とみえる。これだとやはり、〈毛〉と関係するようである。しかしもとより、これにも出典はみえず、〈闘鶏〉とあるので、鎌倉期――かの有名な北条高時がこれを好んだと学んだことがある――の語かと推定できる（鶏合せでは古代に既にみえるが）。『運歩色葉集』のもつ位相、編集者の属する社会、個人の言語体系を暗示す

ると思う（『易林本節用集』などにはみえぬ）。中世俗語ではあろう。もっとも同じく、鶏（トリ）に相手ノトリの毛の好悪を判定する智恵が果たしてあるのか疑問。愛鳥家に真偽をうかがいたいと思う。

〈易〉の〈雲脂（イロコ）〉（人倫）など、『和名抄』にみえるが、〈運〉に、〈雲胎（イロコ）俗用〉とあるのはこの時代に俗用化し、方言化して、語格をおとしたのであろうが、著者の教養を疑わせる。[*(5)] また、〈運〉に、〈一二（ツマヒラカ）〉とあるのは、〈易〉の〈言辞〉にも、〈一二（ツマヒラカ）〉とみえ、日蓮遺文にもみえて、両者が同じ共通した時代、中世社会に属していることを示すことになる。当然のことながら、両者に同じ中世という時代、社会の語彙のみえることは、とりもなおさず、両者の同一社会・時代の一員であることを証していよう。しかし、〈運〉、〈一一三（ウタタネ）（易ハ假寐）一ゝ（ツク〳〵）・三ゝ（ツク〳〵）〉とか、〈一一三（ケシヤウブミ）（易は艶書）・十三（ホタ〳〵）・若ゝ（同）（ホタ〳〵は『岩波古語辞典』には近世上方語としてみえ、漢字表記はみえず）などのみえる点、また〈一八（タヽケヒラク）・／＼（トサマカウサマ）〉とともに、〈𨑹（ハシダテ）丹後天ノ―〉は、珍種中の珍種である。他に類例をしらぬ。まだ、〈留主（ルス）〉はみえず、〈留守（ルス）〉とあり、〈運〉の〈侖吾（論語）〉などは、抄物書で、鎌倉時代よりみえる用字法も時代の産物であろう。以下、字体を問題にするが、略字・異体字を区別なくとり出しておく。

釈・炉・偽・断・奐・換・凡（凡）・勢・弥・油（浊・濁）・幽（幽）・飞（飛）・畧・営・昼・留（留）・奈・辷（ヲシダツル）・辷（ヲレフスル）・肬・灾・泪（ナミダ）・弁（ワキマエル）・唐（カラ）・兩（ウ）（雨）・余・与・幼（ヨウ）・尽・歴・荅（答）・変（ヘン）・労・畜（蛮）・須（須）・乱・炉（爐）・尓（爾）・篭（ロウ）・罕（牢）・来・夢（夢）・煮・皈（カヘル）・帰（同）・隼（軍）・号（スサム）・出（出）・済・痞（クチゴモル）・歯・品・俣（役）・恐（恐）・夘（卵）・点・壷（壺）・献・徃（往）・節・華（筆）・菴・筭・悪・屍・晋・脉・冉・旧・栄・羨・师・刂（引）・職・璽・佗・雑・悉・願（カヘミル）・囲（カコム）・桒（桑）・敉（数）・随・全（全）・済・吾・邉（辺）・渋・脩（備）・花・桜・鴬・芦・流／晋（メツブル）（目潰の語）

なお〈運〉には、〈遍之部〉に、〈遍尽（ヘンツクシ）〉として、〈日（ニチヘン）・疒（ヤマイカフリ）・女（ニヨヘン）・亻（ニンヘン）・氵（サンスイ）・氵（ニスイ）・灬（レンクワ）・宀（ウカンフリ）・口（クニカマヘ）・乙（ヲツニウ）・阝（ヲヽサル）〉など部首名がみえる。部首名は、バテレンの作、『日葡辞書』・『落葉集』にも見えるので参照、対比したい。

おわりに　〈運〉の〈葉部〉のつぎの固有名詞（八代集のこと）をあげておきたい。

〈八代集　古金　後撰　拾遺　後拾遺　金葉　詞花　千載　新古金〉（一・十三ウ）

『古金集』・『新古金集』とは、おそれいった。同じキンながら、――著者はこう想定できそうである。〈運〉の編者のことは、ことわるまでもないが中世に生活の人物である。――この編者のすべてを語って象徴的好例であろう。すなわち、相当な財をなし顕示欲強く、特定の師について学をおさめず、一般的な教養はなく、世俗的な成句などに関心をもち、独学で主として蔵書より学んだ。土地、日本史に登場と思われる人物に、こだわりのある地下人的人物、あるいは下級の僧侶、その個人的ノートでもあろうか。もとよりさらに細部にわたって考察、分析すべきは当然である。

註

(1)　たとえばいずれも、頭字（音）のみイロハ順にすぎない。また『易林本節用集』でも、部の〈乃〉を例にすれば、〈乾坤〉ではじめに、〈暴風（ノワキ）〉を置き、つぎは〈野原（ノバラ）〉などとなる。また、〈言辞〉では、〈述（ノブル）〉の語がグループに、〈饋（ヲクリモノ）〉が混在する。『運歩色葉集』は、さらに諸語彙が混在、混乱している。その他、同じ語彙群に入れるべきを双掲（重複）というか、別々においているなど、乱れは普通にみられる。

(2)　『運歩色葉集』は作成の索引により同語彙の重複など明白になり使用上有効である。なおわたしが主張する第三の仮説、これを証明する例をつぎに二例あげておきたい。

（一）〈易〉：大嘗会（ダイジャウウエ）　天子即位ノ年以二其新米ヲ一献二伊勢大神宮一謂二之――一ト十二月卯日也

〈運〉：大嘗会（ダイジャウウエ）　天子即位之年以テ其（ママ）定之新米ヲ一献ス二天照大神一ニ謂之――ヲ――ト十月卯日也

※〈易〉には〈大嘗会〉が重複（双掲）して二カ所〈乾坤・言語門〉にみえる。この重複現象は、他の語彙にもみえる。

（二）〈易〉：到下（タウケ）／嗜（タシナム）　困（同）＊註文省略

〈運〉：當（タウ）（當の異体）下又峠（ダ）／嗜（タシナム）＊註文省略　窘（タシナム）

右の二例のみでも両者の異なる位相のことが納得できるか。〈運〉にはまた、〈尊氏（タカウジ）〉など、同時代を語る固有名詞（人名）もみえる。〈易〉のタシナムは漢字用法でも判明するとおり、〈困・難・厄・苦〉が原義（古代語）であり、その伝統を示している（〈運〉にみえる〈窘（キン）〉（他動詞）は古代語なら〈苦シメル〉の意で用いられているが、ここは近代語としてタシナム（タシナメル。いましめるの意）の用字であろう。本来は『日本書紀』などにみえるように、タシナシと古代語形ではあるが、ここは近代語として、〈窘（タシナム）〉と用いた例で、『日葡辞書』などに明確なように、近代語、現代語の意味用法でみえ、古代語からの意味転化のよき例である。この点で、〈運〉の用例も貴重であろう。なお、『運歩色葉集』は総索引が既に作製されている由、江戸期の『早引節用集』の考察に専心の研究者、高梨信博君より既に作成されている由、実物を贈呈された。

(3) 私はシナ製に対し日本製の漢語をこのように〈漢字語〉とよんで区別して用いた。すでにのべたところながら、湯桶読みや重箱読み、さらにいわゆる宛字の類も、日本人の漢字用法として正当である。拙論〈仮字ノ論〉（「国文学研究」一九二集）を参照。

(4) 『運歩色葉集』と同時代の歌語の語彙集『詞源略注』（清原宣賢著）に、〈鹿（カ）ヲサシテ馬（ムマ）ト云〉の語句があげられている。シナの『史記』による故事成句の類が本源と説明。著者からして堂上家でも口にした詞が、〈馬鹿（バカ）〉といえそうである。

(5) 『運歩色葉集』については、私見の正当性をその他の語彙でも実証できるが、同書がその雑纂的語彙集にして、『易林本節用集』と一致する語彙のあるのは、念押しすれば、両辞書が同じ中世の所産、成立であること、時期的には前者は後者より新しいが、ともに当然のことでほぼ同時代である。さらに『運歩色葉集』に古代語のみえるのは、方言か彼の属する回想ゆえか、彼の左右の書物にその語彙集的なものの存在している点を転写し転記し、記録して示したにすぎず、いずれにせよ雑纂の産物で、確乎たる主義方針で、この語彙集を編集したわけではなかろう。固有の人名なども、『易林本節用集』に日本人は過去のごく少数のみで、ほとんどみ

えぬことも当然なのである（但しこれにはシナの偉人、有名人は比較的多くみえる）。

なお、終りに一つ疑問点をあげておく。〈イナカ〉の語である。〈運〉には、〈夷中（イナカ）〉（古典仮字遣いではヰナカとあるべき）の一語のみで、〈易林本節用集〉には、〈夷中（イナカ）　田舎（同）〉（言語）がみえる。『類聚名義抄』をはじめ、この中世の辞書（弘治二年本や永禄五年本などもふくめ）には、〈夷中（イナカ）・為中（イナカ）・田舎（イナカ）／田家（イナカ）〉などがみえる。古代からの〈田舎〉が、『運歩色葉集』にみえないのは不可思議で、〈一口（イモアライ）〉（『易林本節用集』）などのみえぬ点とともに、『運歩色葉集』の編者の社会的位置、出身の土地、階層など、疑問のままである。『岩波古語辞典』には、〈田舎（ひなか）〉のみあげて、中世の語彙に、一般的な〈夷中〉のみえない点、これまた不可思議である。

なお、『下学集』や『古典易林本』に登録の〈脚力（カクリキ）〉（シナ語の借用）が『運歩色葉集』にも無く、代って、〈飛脚（ヒキヤク）〉（これは日本的に脚力より作語したと思われる）のみえる点、もっともおそく十七世紀に『運』が成立したであろうことを証する一つの鍵語（キーワード）彙が与えられたと言えるであろう。

―すぎもと　つとむ　早稲田大学名誉教授―